

農林害虫防除研究会 Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

News Letter No.17

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.17

2006年7月31日

研究会所在地：静岡大学農学部生物生産科学科

〒422-8529 静岡県静岡市大谷836

ホームページ： <http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>

巻頭言

休耕田を発生予察と囲り防除に利用しよう

平井一男

(農業環境技術研究所)

今年(H18年)の害虫の発生は静かなのだろうか。春から身近な植物を見ているが、エノキの葉にいる綿のようなエノキワタアブラムシは昨年に比べ少ない。昨年は雪のように舞って周りの植物に分散したり衣服に付いて困るほどだった。バラの新梢や蕾につくイバラミドリアブラムシ、コウメにつくワタアブラムシも少ない。6月下旬に、サクランボ、プラム、ブルーノの2~3本の小枝にアメリカシロヒトリ(4齢)が発生し造網したが、数日後の降雹とその後に捕食蜂により7月上旬には終息した。例年ホウズキに発生するニジュウヤホシテントウもまだ見ていない。

水田ではイネアオムシの発生は多くない。昨年6月は幼虫が多く、次世代が多発するかと思っていたところ、8月は上位葉が食害、田面が紅くなり惨憺たる発生をみた。後を追うように注意報を出した県もある。イネドロオイムシの被害葉かと思っていたらシロマガラメイガもめずらしく発生した。セジロウカはつくばでも多く、西日本では坪枯れが多発したのも記憶に新しい。

さて、昆虫の多発機構は別の機会に回すとして、つくばでは昨年に続いて「お米を食べて花粉症をなおそう」と花粉症緩和米(早稲種キタアケ)を栽培している。今年は2期作で、収穫を倍増して動物試験と食味試験を強化することのこと。今年も「GM 稲が昆虫を誘引しないか」など昆虫相への影響も調査することになった。

4月17日に畑地に設置された隔離水田(5a)に花粉症緩和米 GMO を移植、6月27日には出穂し始めた。このころ周辺のエノコログサとイタリアンライグラスにカメムシが数頭発生していたが、花粉が出ている稲穂にはカメムシが多数飛来し、50株当たり28頭のクモヘリカメムシ、2頭のホソハリカメムシを確認した。稲穂に2~3頭群れて小穂の下部から盛んに吸汁していた。7月1半旬までに交尾・産卵、ふ化した。さすがにカメムシ吸汁で糞〔シイナ〕になって青立ちになるのは GMO 育成者に気の毒に思って〔未必の故意で咎められるかも知れないと思いながら〕薬散を薦めた。すると薬剤散布後2日には防除価100、カメムシは皆無になった。今後の GMO の昆虫影響調査がご破算になるかも知れないがやむを得ない。

02年の熊本大会(6月26~27日)の帰途、近くの動物植物園にシフゾウとキンシコウを見に行

った。植物園側の草むらのイタリアンライグラスにクモヘリカメムシが群れをなし多発生，交尾対も発見し，ついつい2時間余り写真を撮ったことがある。

つくばでは6月後半にはイタリアンは夏枯れ状態でクモヘリカメムシの発生は少なく，むしろ森林に近いエノコログサ群生地に多い。とは言えエノコログサ群落ならどこにでもいるかという
と広範囲を捜しても容易に見つからない。平均すると発生密度は平米当たり1頭未満である。

ところが，前述のように早生稲を栽培して6月に開花させると，カメムシ「バンバン」と大量に集まることが分かった。発生量予察に使えるのではないか。さらに囲り作物としてカメムシをマストラップして防除することはできないか。集めて集めて防除して次世代の密度低下にどのくらい効果があるのか，調査した試しがないならば何かの機会にトライしてみたい。

現在の発生予察の実態を見ると，多くは直前予察で，改善が必要だ。カメムシはイネ科植物で事前調査していると報じられているが，次世代の発生量との関連性はどのくらいなのだろうか。どのくらいの面積を調査したら，どのくらいの面積の予察が可能なのだろうか。長中期予察とまで行かなくても，せめて1か月（次世代）予報くらいは可能にしたい。

かつて大豆栽培で，早生種を囲りに作って虫を集めて防除するとの試験設計を見たことがあるが結果はまだ聞いていない。

現在，休耕田の面積は全国で100万 ha（水田の37%）を超えるという。休耕田の活用に栽培グループでは飼料稲を試験している。分子育種グループには CQ10を稲に産生させ，ゆくゆくは休耕田解消にと夢を温めている人もいる。作物保護，害虫分野で休耕田を利用する一例として，早生稲を栽培してカメムシの発生予察，さらに囲り防除で地域の密度低下はできないだろうか。

かつて移動性に富む突発性昆虫のアワヨトウの1世代幼虫（6月上旬）の発生を知ると，近くに寄主植物があると，2世代目，3世代目も多発することを示したことがある。西南暖地の麦作地帯で多発したら，北陸・北日本に速報すると予察に役立つだろうと思ったことがある。

広大な中国大陸では華南のアワヨトウの発生状況を東北部の侵入地帯に速報する。つまり華南の飛来源で多発すると，北部の侵入地では予察を強化すると聞いたことがある。

近年問題のカメムシについて休耕田に早生稲を栽培し1世代早く発生量を調査し次世代予報，その有効性の検証が必要だ。さらに早生稲を囲りにマストラップしてスポット防除する。その有効性について生物多様性保全や環境保全，低コスト化の視点から，事情が許せば，駄目元で検証したいと思うがどうだろうか。

ニュース

生物農薬の普及と防除暦

黒木修一（宮崎県中部農業改良普及センター）

宮崎県では昆虫寄生菌製剤の利用が急激に普及しています。これは，有効な防除薬剤が少ないタバココナジラミ Q-biotype 対策として，その利用を推奨しているからですが，具体的には作物・作型別に防除暦を作成したことが最大の要因であろうと思われます。防除暦により *Bacillus subtilis* 製剤の利用も一気に進み，長年の難敵であるミナミキイロアザミウマに対する天敵利用も普及する気配を見せてきました。結果として総合防除技術が普及するための知識的・技術的素地が普及しつつあると言えます。

普及事業に携わってみて，生物農薬の利用が大きく広まってこなかった要因を三つほど挙げる

ことが出来ると感じています。一つは、生産者は一旦利用（購入した）天敵が途中で死滅することを「もったいない」と感じ、それ故に同時に利用する農薬の選択に頭を悩ませ、結局は防除の遅れを招いていること。二つ目は生物農薬にその力を超えた期待をかけていること。そして三つ目は、根拠のない「我流」が流布していることです。これらは、生物農薬が安価ではないことや、効果が目に見えにくいことなど一概に言えない原因があるようですが、生産者から見て必要な情報が少ないという言葉で整理することができます。

防除暦の作成は、これらの問題を一気に解決に導く手法ですが、簡単ではないことは周知の事実でしょう。私の担当地区の防除暦には、極論すれば「必要な防除は躊躇なく行い、天敵の温存などは二の次」という一見矛盾することが示されています。このことは、抵抗感のある方には許容しがたいものかもしれませんが、天敵利用の経験が比較的長い生産者からは「肩の荷が下りた」感があると評されることもあります。また、整枝・施肥管理などとも関連づけて各資材の利用方法を示すようにしたことで、生産者には全体の技術の流れが理解できるようです。防除暦に代表される天敵利用法に必要なものは精度とともに「雑」ではない自由度ということでしょうか。

総合防除体系が普及するためには、本年度作が大変重要であると思っています。難防除害虫に有効な薬剤がいよいよ少なくなっている現状で、限られた時間ですべきことは山積みですが、様々な品目で生物農薬の利用が大きく進むときが来ているような気がしています。いよいよ普及レベルでの多産地連携をしていく時期に来ているのかもしれない。

ヨーロッパに侵入したクリタマバチと日本産 チュウゴクオナガコバチによる伝統的生物的防除の試み

守屋成一

(中央農業総合研究センター・総合的害虫管理研究チーム)

2002年、イタリア北部ピエモンテ州クネオ（フランス国境まで約50km）のヨーロッパグリからクリタマバチ虫えいが発見され、クリ大害虫未分布であった最後のクリ産地、ヨーロッパヘクリタマバチがついに侵入した。発見後の広域調査により、虫えいは州内の6地域から新たに発見され、その分布域はすでに160Km²に及んでいた。2005年までに、イタリア中南部のトスカーナ、マルケ、ラツィオ、アブルッツォ、カンパーニャ各州への分布拡大が確認された。2004年には、ピエモンテ州から隣国のスロベニアに1000本余りのクリ苗木が輸出されたが、2005年にそのうちの約半数が追跡調査され、10本の苗木からクリタマバチが発見され、廃棄された。2005年7月にはイタリア・フランス国境付近のフランス側でも発見された。ヨーロッパグリはクリタマバチに対する感受性が高いので、クリタマバチの侵入地域ではほとんどすべてのクリの芽に巨大な虫えいが形成される。このため、巨木を含む多くのヨーロッパグリが枯死するのではないかと危惧されている。日本国内でのチュウゴクオナガコバチによる伝統的生物的防除の成功により、中国原産種の輸出が困難であることから、2003年以降3度にわたり、日本産のチュウゴクオナガコバチが現地に導入され、半野外条件下のヨーロッパグリ苗木での増殖が試みられた。しかし、虫えい形成時期と現地でのチュウゴクオナガコバチ羽化時期について、日本国内で観察されるような同調性が見られないため、次世代はほとんど得られていない。そこで、2006年2月に21,945個の乾固虫えい（チュウゴクオナガコバチが内部で越冬）が再度導入された。しかし、大量の虫えい輸

入によって、虫えい内部や間隙などで越冬している害虫類や高次寄生蜂の持ち込みが懸念される。なお、1995～1996年にチュウゴクグリ8品種がピエモンテ州へ輸入された記録があり、この苗木とともにクリタマバチが侵入したと考えられている。EU内ではクリタマバチがイタリアに定着したため、2003年にEPPO (European and Meditaranean Plant Protection Organization)のAlert List (植物検疫対象)からはずされ、A2 Action List (EU域内に分布する注意すべき有害生物)へ移された。従って、現在ではクリ苗木の移動規制等、EU域内で強制力を伴う植物検疫措置はとられていない模様である。

参考文献

Aebei, A. et al. (2006) Parasitoid recruitment to the globally invasive chestnut gall wasp *Dryocosmus kuriphilus*. In *Galling Arthropods and their associates Ecology and evolution* (Ozaki, K. et al. eds). Springer, Tokyo, Japan, pp.103-121.

大分県のイネクロカメムシは？

小野元治

(大分県農林水産研究センター安全農業研究所)

本誌 15で、滋賀県の小嶋さんのイネクロカメムシに関する記事を読ませていただき、日頃感じたところと併せて、大分県の状況を報告させていただきます。私の研究所内の予察田では、南向き斜面に陽当たりの良い竹林があるためか、毎年クロカメが発生します。20年以上前から確認されており、もちろん無農薬栽培なのでクロカメには非常に快適な生息環境です(時々畦畔沿いで薬剤試験を実施するので劣悪になりますが)。ここでは、既に明らかにされたクロカメ特有の発生活態を確認することができます。畦畔付近から水田に侵入し、徐々に奥に移動します。畦畔沿いで集中加害された株は枯死することがあります。畦付近の株に集中し、特に置き苗に集まります。置き苗に100頭もの成虫が生息している状況は、他のカメムシ類のように集合フェロモン?が分泌されているように見えます。フェロモン剤が開発されれば防除に使いそうです。被害は畦畔際に限られ発生予察には支障が少ないため、防除せずに放っておきますが、定期調査時には黒い成虫や淡褐色の丸い幼虫が頻繁に確認されます。クロカメの多発状況や被害を観察されたい方は、当研究所の予察田を見に来てください。

大分県でも、近年他県同様にクロカメの発生地域は増加しているようで、成虫の発生盛期である7月中旬頃に農家からの問い合わせが増えてきた感があります。減農薬栽培の増加や温暖化が増加原因と思いますが、幸い広域で被害が発生した例は確認されていません。大分県の平坦地では田植えが6月中旬以降と遅いので、成虫の侵入する7月まで育苗箱施薬の効果が十分持続できるためだと思われます。育苗箱施薬の試験結果では、フィプロニルの効果が最も高く、ベンフラカルブ、クロチアニジン、ジノテフランでも十分な防除効果が得られました(注意!これらの薬剤は水稻には登録があってもクロカメには登録がありません)。広域で被害が発生しない理由は、ウンカ・ヨコバイやイネミズソウムシ等の水稻初期害虫防除の育苗箱施薬により併殺されているからでしょう。多発圃場が場内にあるため、クロカメは格好の研究材料ですが、主要害虫ではないので他調査の間隙を縫って、未知の部分をしつずつ調査したいと考えています。

この原稿を作成している6月上旬現在、果樹カメムシの発生量が非常に多い様です。今年も、

カメムシ年になるのでしょうか？



イネクロカメムシの被害



置き苗に群がる成虫

キンウワバ対策委員会（仮称）からのお知らせ

野村昌史・八瀬順也

（千葉大学園芸学部・兵庫県立農林水産技術総合センター）

2000年頃に明らかとなったイラクサギンウワバの各地ほ場での発生により、ほ場での幼虫の分布調査を行うとともに、性フェロモントラップによる成虫の誘引調査も行う必要があると考えられました。サンケイ化学の永田健二氏のご尽力により農業環境技術研究所の杉江 元博士が快く合成性フェロモルアーを作成してくださり、現在は各地でトラップ調査が行われています。

この各地で誘引試験等を行ってくださっている方々を中心に「キンウワバ対策委員会」もしくは「キンウワバ友の会」という怪しいのか怪しくないのか、堅気なのか堅気でないのか・・・一見よく分からない集団が一方向的に結成され、この怪しげな組織名で学会発表や雑誌の記事を執筆するというきわめて不可解な活動を行っています。性フェロモントラップを仕掛けている方々は自動的にメンバーになっておりますし、この他にも我々の関係者はいつの間にかメンバーになっていたりすることから苦情などが殺到する可能性も指摘されておりましたが、幸い、これまでのところは何もありませんので、今後もメンバーの方は活動よろしく願いいたします。

また、イラクサギンウワバに限らず、タマナギンウワバやキクキンウワバといった蔬菜害虫になっているキンウワバ類の性フェロモルアーも杉江博士に作成していただいております。これらの試験も行っています。データは折に触れて公開予定ですが、要望があればお答えいたします。次回の研究会大会では各地の各種データも発表していく予定です。

また、キンウワバ対策委員会の活動に興味がある方には性フェロモントラップによる誘引試験やほ場調査などといった各種特典を用意しておりますので、我々代表まで気楽にご連絡いただければと思います。

最後に、代表者の一人野村は、ほ場で発生しているキンウワバ類の種や属レベルの同定も行いますから、幼虫を（可能ならば生きたまま）送っていただければ対応いたします。

ゴミムシ類調査を始めた私とその周辺の人々

増田俊雄

(宮城県農業・園芸総合研究所)

昨年度から、露地アブラナ科野菜畑及びその周辺部のゴミムシ類調査を始めた。昆虫病原糸状菌の標的外昆虫類に対する影響を見るため、その代表としてゴミムシ類を選択したのである。もちろん、土着天敵としてのゴミムシ類の有効利用も視野に入れての話だ。調査を始めてまもなく、つくばでの会議で、ゴミムシをやっていらっしゃる野菜茶業研究所のK野さんとお目にかかり、「ゴミムシって面白いですよ、美麗種も多いし・・・。」などと盛り上がり、かなりやる気になった。

ゴミムシ類の採集は、徘徊性昆虫類採集の常道であるピットフォールトラップを用い、昨年は何の疑いもなくトラップ内に乳酸飲料(カルピス)を入れた。ところが、本年2月に開催された北日本病害虫研究発表会で、やはりゴミムシ類の仕事を精力的に行っている東北農業研究センター畑地利用部のY下さんから、「トラップに餌を入れると特定の種が集まる可能性等があるので、餌は入れない方がよしい。」とのご指摘があった。愕然とした。学生のときに、昆虫採集好きの後輩から(たぶんオサムシトラップだったと思うが)、「餌はカルピス！」と刷り込まれていたらしい。このことを東北農業研究センターのS原さんに話したら、「僕は、すしのこが良いと聞いている。」とのこと、オサトラとS原さんはさすがに奥が深いと感心した。そんなわけで今年は、餌なしのピットフォールトラップで調査を行っている。カルピスを入れなくても大丈夫かいな?と少し疑っていたが、今のところ昨年並みに採集されている状況である。

最後にピットフォールトラップに入った変わり種を紹介する。当研究所虫害担当のM田君は、現在おもに施設害虫の天敵利用の仕事をしているが、学生時代は理学部で干潟のカニを研究していた変わり種である。といってもM田君が落とし穴に落ちたわけではない。なんとピットフォールトラップにサワガニが入ったのである。研究所の敷地内にサワガニがいるらしいことはM田君から聞いていたが、まさかアブラナ科野菜圃場内で取れるとは思ってもいなかった。なぜ圃場内をウロウロしていたのかは分からないが、今そのサワガニはM田君の実験台の上で元気に暮らしている。

イラガの幼虫を素手でつぶす！！

井村岳男

(奈良県病害虫防除所)

かれこれ10年近く前のこと、私が農業大学校で果樹栽培を教えていた時の話です。天気の良い秋のある日、圃場管理を担当して頂いている技能員さんとカキを収穫していました。作業しながらの雑談で、「イラガを見つけたら、その日は作業で畑に入るのが怖くなる。」というような話をしていると、その技能員さんは、「なんや井村君、イラムシ(イラガの幼虫のこと)なんか怖いんか。ワシなんか素手でつぶしたるぞ。」と言って、葉裏にびっしりついたイラガの若齢幼虫集団を、目の前でプチュプチュッとつぶしてしまったのです。

その技能員さんは、手の皮が人一倍厚い訳でもなければ、イラガの毒に耐性を持っておられる訳でもありません。「あいつらは、こっちがビビってると、ナメられて刺されるんや。『お前な

んか怖ないわ』って睨みつけてビビらしたら、手でつぶしても刺されへんのや」などと嬉しそうに解説して下さるのですが、じっくり話を聞くと、どうやらコツがあるようです。その技能員さんの話では、イラガのおしりにある2本の角(毒棘)がピンと立っている時に触ると刺されるが、しばらくじっと睨んでいると、イラガは「ビビって」おしりの角をユラユラと振り始める。その時に一気につぶすと刺されないそうである。昔の果樹の技能員さんは皆この程度のことは出来たとのこと。

イラガ幼虫のこのような習性が、専門家の間でどの程度知られているのかは面倒臭いので調べていませんが、イラガ幼虫を狙う捕食者などがこのような習性を利用していたりしたら、研究テーマとしては結構面白いかも知れません。とりあえず、夏の昆虫学会あたりで、「イラガ幼虫の捕殺技術」などと題して実演したら、興味本位の客で満員になることは間違いないと思います。とはいうものの、私自身はまだ、自分で試してみたことはありません。実は私はイモムシ・ケムシが大の苦手なのです。仕事でハスモンヨトウやオオタバコガの幼虫を掴むのさえ、冷や汗が出てくるというのに、イラガをつぶすなどという大それたことはとてもとても…。誰か物好きな方がおられたら、試して見てください。

虫を飼う

新美信哉
(三共アグロ㈱)

「虫を飼う」というと、普通どんなことを想像されるのでしょうか？ 古くは秋の夜長にその音色を楽しむために飼った鈴虫のような家庭的なものや、絹を取るためにお蚕様を育て、その桑を食むさわさわという五月雨のような音を聞きながら眠ったなんて生活に密着した飼育もありました。男の子だったら夏休みに、真っ黒になって捕まえたカブトムシやクワガタムシにスイカやキュウリをあげて飼育したりというのが一般的でしょうか？ また、アゲハチョウなど卵や幼虫を捕まえてきて、葉っぱを取り替えて蛹にし、わくわくしながら羽化を待った、なんて記憶のある方もいらっしゃると思います。どちらにせよ、最近あまり虫と触れ合う機会はなく、虫といえば蚊やハエ、ゴキブリといった不快害虫を連想される方が多いのかもしれない。

わたしは大学の研究室でのカイコの研究を皮切りに、農薬会社への就職後も研究所に勤務し、それこそ大量の虫の飼育に毎日明け暮れたものでした。今懐かしく思い出すのは、毎年新人研修で虫の飼育を体験させたときの新人たちの反応です。もちろん農薬会社の新人といってもいろいろな方がいますので、虫を触ったことがないなんて新人もいますし、もちろん女性もいます。毎年何人かが研修に来て、飼育実習(要するにえさ換えと容器の掃除)をさせるわけですが、やっぱり特有の臭気とグロテスク(?)な外見にたじろぐ新人がほとんどでした。ゴキブリの容器掃除では、普通のマスクどころか有毒物除去用の防毒マスクを持参した新人もいておどろきました。またゴキブリは平気なのになぜか芋虫は絶対だめ!といい続けている新人もいました。これを読んでおられる方は、おおむね虫に親近感を感じていらっしゃる方が多いと思いますが、はじめて虫を飼われた時はどんなことを感じられたのでしょうか？ 虫嫌いの女性に、ハダニの産卵を顕微鏡で見せたことがあります。リアルなハダニのアップにもっと虫嫌いになるかと思いきや、「あんな大きな卵を産むんだ。がんばっていきんでいる姿がかわいいー」だって。やっぱり、これからの子供たちにはもっともっと虫に触れて、虫を知る機会を持ってほしいと思いますね。

お知らせ

第16回天敵利用研究会のお知らせ

天敵利用研究会茨城大会が以下の日程で開催されます。

日時：2006年12月13日（水）～14日（木）

場所：ホテルレイクビュー水戸（茨城県水戸市）

詳しくは後日、大会事務局から関係機関に案内文を発送いたします。

第23回国際昆虫学会議の案内

標記学会が以下の日程で開催されます。

日時：2008年7月6～11日

開催場所：南アフリカ共和国ダーバン

関連 WEB：www.ice2008.org.za

第26回常任幹事会議事録

日時：2005年12月15日（木） 13:00～15:00

場所：ホテルラングウッド会議室（東京都荒川区東日暮里）

出席者：平井一男，上遠野富士夫，廿日出正美，廣森 創，根本 久，阿久津四良，小林政信，
田中 寛，西松哲義，古橋嘉一，春山裕史，山本敦司，本山直樹，本多健一郎，松淵定
之，横須賀知之，池山雅也，丸山宗之，宮田将秀（増田敏雄代理），栗原 潤（荻原
洋晶代理）（順不同，敬称略）

議 事：

報告事項

1. 第25回常任幹事会の議事録の確認

本幹事会で承認された。

2. 平成17年度農林害虫研究会石川大会報告

廣森氏より報告があった。大会参加者170名(内，会員108名，非会員62名)。当日12名の新規入会があった。大会参加者のうち情報交換会への出席者は143名であった。大会会計が報告され承認された。

時間の制約から一般講演数を制限しているため検討が必要。

出席できない一部会員から，講演要旨購入の要請がある。ニュースレターに購入方法を案内することとする。

3. 事務局報告

廣森氏より平成18年12月現在の会員動静（会員数409名で昨年比20名増，2005年度新規会員26名，2005年度退会者6名）が報告された。さらに，平成17年度予算執行状況の説明があり了承された。

4. ニュースレター 16の編集状況

横須賀委員から現況が報告された。現在10名の投稿と，石川大会の報告，阿久津幹事の巻頭言で全体を構成する。2006年1月10日ごろ発送予定。

5. 議題

1)平成18年度農林害虫防除研究会千葉大会について

上遠野幹事より千葉大会の開催概要が紹介された。

開催場所：千葉大学西千葉キャンパスけやき会館

情報交換会：同キャンパス大学生協会館。

日程：2006年6月22日(木)～23日(金)

運営予算：研究会から20万円，日植防賛助金20万円，大会参加費2000円(会員)，3000円(非会員)を予定。

準備委員：本山，野村(千葉大)，清水(千葉県庁)，渡邊(千葉防除所)，上遠野(千葉農試)(敬称略)。

シンポジウム企画：上遠野委員より「コナジラミ類によるウイルス病の発生と対策」と「最近の難防除害虫と対策」の2案が出され，前者で行うことが決定された。

一般講演：石川大会で講演数を制限したことをうけ，2日目の日程を午後3時頃まで延長する方向で検討することとなった。

当日入会者の扱い：当日の入会者も会員として扱うこととした。

2)平成18年度農林害虫防除研究会開催候補地について

千葉大会の総会にて次回大会開催県を報告する。東北地方で開催することとし，山形県を開催候補地とした。

3)平成18年度予算案及び事業計画について

廣森事務局長から予算案の説明があり了承された。平井次期会長から事業計画の説明があった。主な事業は，第27回常任理事会(平成18年6月 千葉)，第11回研究大会及び総会(同)，ニュースレターNo.17発行(平成18年6月)，ニュースレターNo.18発行(平成18年12月)，第28回常任幹事会(平成18年12月日植防会議室)

6.その他

1)特集号の発行について

平井次期会長より平成19年12月発行予定のニュースレター 20を特集号として発行することが提案された。検討のためワーキンググループ(メンバー：阿久津，田中，横須賀，山本各委員)を設置して内容等を検討することとなった。

2)常任幹事会の交通費について

個人休暇，経費で出席している状況にある。検討の結果，平成18年度から役員等が出席する場合，実費の半額以下，上限1万円を支給することが承認された。

3)平成18～19年度役員の委嘱について

委嘱状を本議事録とともに2006年1月に発送する。

4)会員名簿の作成について

ニュースレター 17に掲載する旨を 16に予告して会員の意志を確認した後，可否を判断する。なお，掲載の場合は，名前と所属団体のみとし，“あいうえお”順とする。

(書記 林 直人)

第27回常任幹事会議事録

日 時：平成18年6月22日(木) 11時00分～12時30分

場 所：千葉大学けやき会館レセプションホール(千葉県千葉市)

出席者：平井一男，上遠野富士夫，廣森 創，根元 久，阿久津四良，小林正信，田中 寛，井村岳男，古橋嘉一，春山裕史，山本敦司，本多健一郎，松淵定之，横須賀知之，増田俊雄，豊嶋悟郎，林 直人，宮井俊一，後藤哲雄，笠松紀美，行徳 裕，荒川昭弘(次期大会代表代理) (順不同，敬称略)

議事：

報告事項

1. 第26回常任幹事会の議事録の確認

メールで回報，本幹事会で承認された。

2. 事務局報告

廣森氏より平成18年3月時点の会員動勢(397名)，平成17年度事業報告並びに予算執行状況説明があり了承された。

異動にともない，福島県，長野県，京都府，高知県，佐賀県幹事が交代した。その他の都道府県についても異動状況を把握し，交代の有無を確認することとなった。

3. ニュースレター 17の編集状況

行徳委員より報告された。17については7月下旬発刊を目途に進めている。10題の掲載を予定している。

現在，原稿依頼を郵便で行っているが，E-mail利用により経費削減，事務の簡素化を図りたい。

4. 議題

1) 平成19年度農林害虫防除研究会大会について

福島県で実施することとなった。企画，日時，場所については福島県を中心に検討する。発表資格は大会毎に異なっていた。今後は，講演申し込み時に入会することが条件となる。

2) 平成18年度予算案および事業計画

廣森氏から予算案，事業計画に説明があり，承認された。

ニュースレター 20記念誌の企画が行徳氏から提案され，大筋で了承された。企画内容についてはニュースレター 18に掲載し，会員の意見を求める。

5. その他

ホームページへは，ニュースレター最新号の前号まで掲載することが了承された。

(書記 林 直人)

農林害虫防除研究会会則

(名称)

第1条 本会は，農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳を Agricultural Insect Pest Management Society of Japan (略称 AIPM Society of Japan) とする。

(目的及び事業)

第2条 本会は，農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い，会員相互の知識の高揚と親睦を通じて，農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は，目的達成のため次の事業を行う。

(ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換

(オ) その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

(会員)

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

(役員等)

第8条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 常任幹事 25名前後
4. 事務長 1名
5. 都道府県幹事 47名
6. 会計監査 2名
7. ニュースレター編集担当 1名
8. 情報担当 1名

第9条 役員の任期は2年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員の選出方法は以下の通りとする。

(ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考し、総会で承認を得る。

(イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第12条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年1回、通常、大会期間中に開催する。大会は毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費、寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 1. この会則は平成8年6月22日から施行し、一部改正を平成13年6月28日に行った。

2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い、会計年度を以下の通りとする。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日、平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。

農林害虫防除研究会役員名簿 (2006 ~ 2007年)

会 長：平井一男

副 会 長：上遠野富士夫，丸山宗之

常任幹事：阿久津四良，井村岳男，江村 薫，笠松紀美，行徳 裕，河野義明，後藤哲雄，小林政信，西東 力，田中 寛，西松哲義，根本 久，萩原保身，春山裕史，林 直人，二口欣也，古橋嘉一，本多健一郎，増田俊雄，松淵定之，宮井俊一，宮田 正，村井保，本山直樹，山本敦司，横須賀知之，和田哲夫

事 務 長：廣森 創

会計監査：久保田 栄，片山晴喜

ニュースレター編集担当：行徳 裕，山本敦司

情報担当：本多健一郎

農林害虫防除研究都道府県幹事名簿

都道府県名	氏 名	都道府県名	氏名	都道府県名	氏名
北海道	中尾弘志	青森	川嶋浩三	岩手	藤沢 巧
宮城	増田俊雄	秋田	新山徳光	山形	上野 清
福島	荒川昭弘	茨城	上田康郎	栃木	小山田浩一
群馬	千本木市夫	埼玉	根本 久	千葉	上遠野富士夫
東京	小谷野伸二	神奈川	阿久津四良	山梨	村上芳照
長野	豊嶋悟郎	新潟	中野 潔	富山	村岡裕一
石川	笠島 哲	福井	高岡誠一	岐阜	平 正博
静岡	久保田栄	愛知	滝本雅章	三重	大谷一哉
滋賀	小嶋俊彦	京都	徳丸 晋	大阪	柴尾 学
兵庫	足立年一	奈良	井村岳男	和歌山	森下正彦
鳥取	伊澤宏毅	島根	奈良井祐隆	岡山	近藤 章
広島	林 英明	山口	和泉勝則	徳島	中野昭雄
香川	松本英治	愛媛	萩原洋晶	高知	広瀬拓也
福岡	堤 隆文	佐賀	衛藤友紀	長崎	大久保宣雄
熊本	行徳 裕	大分	小野元治	宮崎	黒木修一
鹿児島	井上栄明	沖縄	谷口昌弘		

ゴシック文字は新県幹事

研究会への入会方法

事務局（廣森 創，静岡大学農学部生物生産科学科，〒422-8529静岡市大谷836，Tel&Fax：054-238-4825，E-mail：ahhirom@ipc.shizuoka.ac.jp）までお知らせください。News Letterと振替用紙（郵便振替：農林害虫防除研究会00810-0-82999）をお送りします。年会費は 1,000円です。

お願い

2006年度会費の納入をお願いします。2005年度までの会費未納年度を宛名ラベルの下部に、西暦の下2桁で示してあります(2005年度まで納入済みの方は何も書いてありません)。年会費は1,000円です。会費納入について不明な点があれば、事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

ニュースレターへの名簿掲載に関するお知らせ

前号でお知らせしました、会員名簿(氏名および所属のみ)掲載については、個人情報保護などの観点から幹事会で継続検討となりました。

編集後記

News Letter No.17~20の編集を担当する熊本の行徳です。今後2年間、会員の皆様には原稿の執筆でお世話になります。

さて、害虫防除や研究を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。本年5月に施行されたポジティブリスト制度もその一つですが、予算や人員に削減によって、タバココナジラミQ-biotypeの分布拡大、海外飛来性ウンカ類の薬剤感受性の低下と飛来量の増加、斑点米カメムシ類・果樹カメムシ類の恒常的な被害等々、次々と発生する問題に個々の機関や害虫防除関係者で対応できなくなっていることも要因の一つです。環境を改善するためには、情報を共有化し、同じ視点で研究を進める「場」を設けて、関係者が協力、分担して効率よく問題に対応することが重要と考えます。前任の横須賀さんが本誌の編集ポリシーを「現場から基礎までのあらゆる井戸端情報が飛び交う舞台」と述べておられます。会員各位が私蔵(死蔵)している様々な情報・意見を掲載していただき、本誌が有意義で楽しい情報共有、交換の「場」になれば・・・と思います。ご協力をお願いします。

ニュースレターでは365日、原稿を受け付けています。奮ってご投稿下さい。投稿方法は、(1)電子メール、(2)フロッピーディスク郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。文字数は400~1200字程度で写真の掲載も可です。使用するワープロソフトとしては、Windows版の一太郎、Word、Ms-Dosテキストを歓迎します。書式(スタイル)の規定は特に設けません。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：行徳 裕

熊本県農業研究センター生産環境研究所病害虫研究室、〒861-1113 熊本県合志市大字栄3801,
Tel: 096-248-6490, Fax: 096-248-6493, E-mail: gyoutoku-y@pref.kumamoto.lg.jp.

***** ニュースレター No.17 (2006年7月発行) 目次 *****

< 巻頭言 >

休耕田を発生予察と囲り防除に利用しよう	平井一男	1
---------------------	------	-------	---

< ニュース >

生物農薬の普及と防除暦	黒木修一	2
ヨーロッパに侵入したクリタマバチと日本産チュウゴク オナガコバチによる伝統的生物防除の試み	守屋成一	3
大分県のイネクロカメムシは？	小野元治	4
キンウワバ対策委員会（仮称）からのお知らせ	野村昌史・八瀬順也	5
ゴミムシ類調査を始めた私とその周辺	増田俊雄	6
イラガの幼虫を素手でつぶす!!	井村岳男	6
虫を飼う	新美信哉	7
お知らせ		8
第26回常任幹事会議事録		8
第27回常任幹事会議事録		9
農林害虫防除研究会会則		10
農林害虫防除研究会役員名簿		12
農林害虫防除研究都道府県幹事名簿		12
研究会への入会方法		12
お願い		13
ニュースレターへの名簿掲載に関するお知らせ		13
編集後記		13
目次		14